

白-「さらしな」にある日本の美意識の核心

「さらしな」という地名の力の源泉を明らかにする本を作りました。「白」さらしな発日本美意識考」です。

なぜ「さらしな」が全国のおこがれになったのか調べているうちに、日本人の暮らしのすみずみにある「白の美意識」に気がつきました。更旅シリーズで書いてきたものに加筆修正したり、新たに書きおこしたりしたものをまとめました。A5版、112ページ（左に目次一覧）。ご希望の方には差し上げています。

本書の感想（書評）を、さらしな里のシンボル冠着山（姨捨山）の保全に取り組む上水清さんと、千曲市で画廊を主宰する西澤賢史さんからいただきました。ご了解を得て、掲載します。

目次

はじめに

すみずみまで白

毎朝体内に「白」再生、再出発	8
白を食べて精気	10
すがすがしい日本語たち	12
白に込めた川端康成さんの美意識	14
花を見ると「胸がすく」白洲正子さん	18
神が宿る代	20
世界のフジタを生んだ白	24
平山郁夫さんの命の原点は白	28
白に46憶年の美 千住博さんの「フラットウォーター」	35
万葉集の白に理想世界求めた藤原定家	40
雪に磨かれた白の美意識	46
純白の産所で生まれた皇子たち	54
白い道の先で待っている阿弥陀如来	57
神聖な白の味さらしなそば	60
サラダ記念日の白	64
白い「天気の子」	66
家康が築いた白い天守閣	69
白砂の海に浮かぶ月の館	71
白いさらしな	
白を強烈にイメージさせる地名	74
春の小川とさらしな	77
さらしなにある黒彦と白彦	81
純白のイメージで「更級日記」	85
鎌倉時代に発見された白いさらしな	90
さらしな姫の持統天皇	95
再生イメージ音の集合体	98
さらしなは心のキャンパス	104
さらしな焼きそば	108
おわりに	

白

さらしな発

日本美意識考

大谷善邦

「地名遺産さらしな」(2012年、たつもりです。

さらしな堂出版)は、さらしなのすばらしさ「スーパーブランド地名」を実証するための証拠を調べ上げて書き綴った貴重な書物となっていますが、今回の日本の美意識の原点を解き明かし明確にした「白」は、さらにそれを掘り下げて、なにゆえ都人は「さらしな」にそれほどまでに憧れたのかという疑問に答える内容となっているように思いました。

月は美しく人の心を癒してくれるもの、特に「慰めかねつの月」(古今和歌集に載る「わが心慰めかねつさらしなや姨捨山に照る月をみて」)は特別の月であって、その月がさらしなを有名たらしめた。その程度にとどまっていた段階を更に深く掘り下げて、ゆるぎなき証拠(原理)を確立させる

「月の都さらしな」のゆるぎない原理

ための労作であると思います。「一気に読み続ける」ということは、引き付けられて離れられない、ということですから。

と名付けよう。

さらしなは「白いキャンパス」、だからあまたの人が自分の世界を描きに当地を訪れた(107ページ)

私は、最近、修験道に凝っていました、神道、山岳信仰、仏教、陰陽道などの文献などを読むことが多くなりました。いずれも日本人の心の源流に関わる内容です。その中でも神道の思想・教えは、「清き赤き心」であることに特別な意味を感じとって楽しく付き合っています。

さらしなは白、再生復活の地。白で世の中をあつと言わせ、さらしなを元気づける。次の遠大な課題が見えてきましたね。

先日も、更級小学校の冠着山登山の案内人として、霊峰冠着山を案内しました。その時、坊城平の鳥居の前で、この「清き赤き心」について資料を添えて20分ほど説明する機会を与えられ、子どもたちにわかりやすく説明し

冠着山の自然と文化遺産を

保存する会事務局長

上水清

とても良い企画の本だと思えます。大上段に構えず、日本人の心の底にある豊かな情感、哀惜、懐心、とても言

いましょうか、《白》に感じる心を、《美》意識やさらしなの地、そしてその地名に結びつけた注目を拍手します。

「白」に感じる心を

地名から解明

《美》の観点で言えば、紙の白と墨の色、特に水墨画の世界に、さらしなは日本画の要点である『何を描き、何を描かないか』に「白の美意識」があります。描かないスペースの持つ想像、思い

直接お会いしての話の中を感じた思いもあります。そのお話の内容もまたお伝えして、「白」を考察する参考にしていただければと思います。

アートサロン千曲代表

西澤賢史